

# 老々介護の移乗技術

永生会地域リハビリテーション支援事業推進室

石濱 裕規

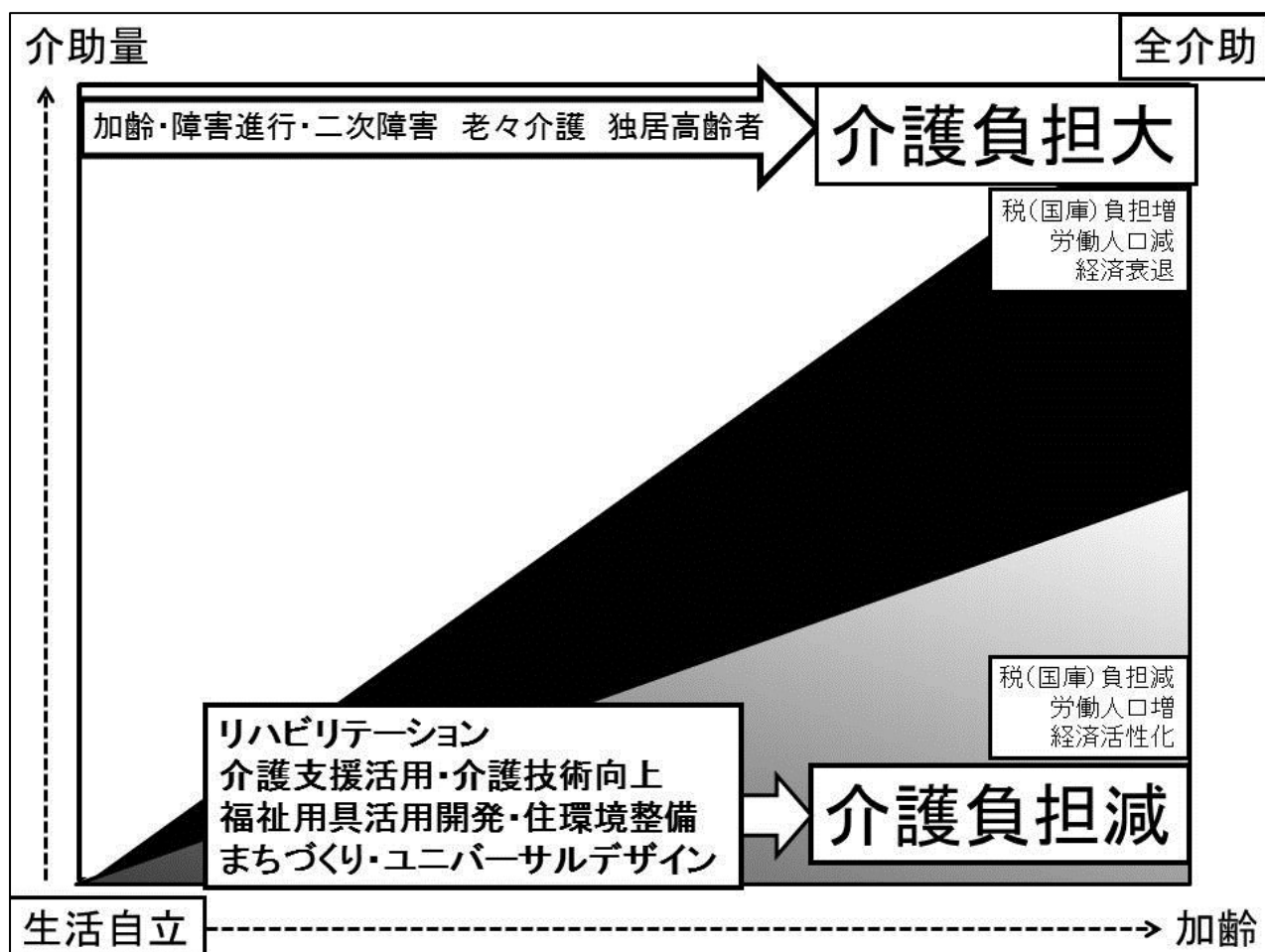


図1 介護負担軽減に資する因子

介護負担の軽減に資するべき福祉用具は、介護を必要とされる方に適した製品が選ばれ、そしてその製品機能を十分に活用できて、初めて介護負担の軽減、そして生活のゆとり・生活の質の向上につながる。特に、老々介護世帯では、情報資源・身体的介護力が不足しがちな分、より身体的負担につながらない介護技術の工夫、福祉用具を活かす介護技術が大切になってくる。

訪問リハビリを通じて支援させて頂いていた方のうち、忘れえぬ御一人である斎藤實さんは、多発性脳梗塞と認知疾患を患い、同居の息子さんも仕事が多忙のため、主介護者は、実に30年以上、慢性関節リウマチを抱える妻・百合子さんであった。

「急激に悪化したのはここ3年くらい。体の自由がきかなくなり、言葉が出にくくなった。これに認知症が追い打ちをかける。要介護4となり、百合子さんはデイサービスや訪問介護などの介護保険サービ

スを積極的に利用した。しかし、實さんはこれを嫌がった。「羞恥心が残っていたのでしょう。ヘルパーさんがお風呂に入ってくると大騒ぎになる。ショートステイには無言の抵抗を示し、帰宅してから涙を流す」（百合子さん）。そんな實さんを見て、百合さんは大きな決断をする。「自宅でできるところまでやってみよう」。

だが、百合子さんには、リウマチという長年の持病があったから、当然周囲は大反対。しかし、（ずっと私のことを世話してくれてきたからと）「百合さんは決意を曲げなかった。「私は無理がきかない体ですが、子供たちは協力してくれるし、近隣の方もなにかと気にかけてくださる。だから、なんとかやっていけると思いました」。・・・・・・・・

ひざが悪く、しゃがむことが困難な百合さんは、自ら工夫して、ブレーキをかけやすいよう、レバーに棒を取り付けて、後ろから簡単に手が届くようにした。さらに、折りたたみ時には、着脱できる簡易のヘッドサポート（頭の支え）を自作した。「介護が楽に行えるよういろいろと工夫を図ることで、楽しみが生まれてくるはず」（石濱さん）。百合さんからいろいろなアイデアが生まれてきている。」

（以上、週刊東洋経済誌 2011 年 12 月 10 日号より抜粋引用）

實さんは、本年の元旦の挨拶回りに出向かれる途中、心不全のためお亡くなりになられた（享年 74 歳）。元旦の朝も、妻・百合さんがベッドから車いすに移乗してお元気に食事をとられ、最後に発せられた言葉は、「おもち」であったという。先日、お伺いした折、百合さんは、「今は、95 歳になる母の介護に通っていて、夫の介護で得た技術が大活躍しているんですよ。」と話して下さいました。

實さんの起居・移乗時には、リフトの活用も検討したことがあった、百合さんは、リウマチによる手指変形のため、操作の不安を懸念され、御自身の介助で車いす移乗を行っていた。



図2 ベッド機能、ピロー、スライディング・シート、車いす機能を活かした移乗介助

百合子さんと検討し、工夫してきた移乗介助方法には、以下の特徴があった。

- ① 側臥位への寝返り動作へのポジショニング・ピローの活用
- ② 起居動作時のベッド背上げ・膝上げ機能の活用
- ③ スライディング・シートの活用
- ④ ティルト・リクライニング型車いすのアームサポート高さ調節機能の活用

ベッドから車いすへの移乗は、多くの場合、起居と連続した動作である。従って、特に、ピローの効果的利用と、ベッドの機能の十分な活用が重要になる。十分に福祉用具の機能を使いこなすこと、そして、活用技術を伝え、工夫しあうことが、介護負担軽減と生活の質の向上につながることを、斉藤さんご夫婦は教えて下さいました。本講習会においても、こうした工夫をお伝えさせて頂き、工夫を重ねることの楽しさを分かち合いたいと考えております。



図3 ピロー・ベッド機能の活用